

らなければならぬわけがあるので、即ち僧侶とならなければ、眞の解脱の境に達し得らるべき筈はないといふ理論に歸着するのである。此の理由がなかつたならば、態々出家して、此の六かしい戒法を骨を折つて行つて行くわけがないのである。斯くの如き特殊の宗教的倫理、これ即ち戒法である。

律師はまた盛んに十善戒を唱道せられた。殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋意、愚痴、之を身三口四意三の十善戒といふ。二百五十の具足戒は、一般の人に、とても守ることが出来ないものであるから、一般倫理として、此の十善戒を守らしむるといふのが其の旨趣であらう。理窟は何とでもつくものであるが、正當に言へば、十善戒は具足戒を守れぬもの、完全に宗教的倫理を身につけつことの出來ないものに、方便として守らす一般倫理である。十善を眞に守つて行くといふことが本當に出來れば、固より善いことには違ひがないが、之を今日の倫理觀に照して、多くの人々の満足を買ふに足る倫理説とすることが出来るか否やは甚だ疑問である。否、最早疑問ではないかも知れない。

之を要するに、律師の戒律主義は、どの方面から考へても今後の世界に大に適合し、大に榮ゆるものとは受け取れない。けれ共、旗幟を鮮明にして、ルーテル宗が、ローマ教から分離した様に、鮮かに非戒律主義で立つものでない限り、從來の宗派の中に生きて居る以上は(眞宗は別として)どの宗の僧侶に對しても、我々は清僧たるべきことを要求したい

と思ふ。頭髮を剃り、法衣を着けて、丸髷の細君と相並んで行く矛盾は見るに忍びない。金を打て誦經修法しながら、庫裡に牛肉の臭は嗅ぐに忍びない。我々が舊佛教の僧侶に望む所以は、清淨寂靜の生活である。此の要求に對して、我々を満足せしめ得たものは、獨り最近に雲照律師唯一人あつたのみではないか。律師が、最後まで多くの崇拜者に圍繞せられて居つたのは、全く之がために外ならない。

社會の變化、思想界の動搖は、今方に多くの佛教徒をして左支右吾、舊の如く新の如く、矛盾撞着の巷に彷徨せしめて居る。律師は此の間に處して飽くまで舊形式を捨てず、之を以て飽く迄世に戦はれた。此の戦はよし最後の勝利を得難いものであるにもせよ、其の奮闘は萬世の龜鑑である。舊佛教最後の光明として、永く明治佛教史上を照らすべきものた



團十郎の追憶

文學博士 坪内逍遙



市川團十郎

上方俳優であつたが爲に、それらと團十郎との藝風の相違が最も著しく私の心を牽いた。

私の東京へ出たのは明治九年で、十八歳の秋であつたから舞臺で團十郎を観たのは其翌年が初めてであつたと思ふが、地方にある頃から、草双紙の棚繪や東京みやげの宵顔畫で、今の若い人達がデューゼやベルナルに親炙して居る程度以上に、團十郎といふ者を知つてゐた。八代目や海老藏も、七八年以來の馴染であつた。そんな縁故も有力な原因となつて、一たび舞臺上に觀た團十郎は、幼稚な私の演劇術上の活きた理想とも渴仰の目的ともなつた。母や姉が芝居好きであつたので、名古屋にゐた頃から、目ぼしい興行は大抵かゝさず觀てゐたのであつたが、其頃土地で人氣の多かつたは、先づ實川延若、嵐璃瓶、中村宗十郎、市川九藏などであつた。併し比較的最も屢々目に觸れてゐたのは

きも、彼れが書卸し以後三度目に演じたのが最も深く目に殘つてゐる。それから毎回、その最後のまでも觀たが、第四回以後は藝が次第に荒んだ。活歴式で初めて私の心を動かした

は、千代田神徳の鷹野歸りの家康、仲藏の老農夫と松並木の應対は、哀れな處でも何でもないのだが、二人の態度といひ口吻といひ、如何にも自然で、真率で、ひとと心線に觸れる所があつたので、覺えずほろ／＼と涙を落したことを憶ひ出す。黄門記の光圀、西南戦争の隆盛、それから時代順にかまはず言へば、妹春山の大判事、島の爲朝、熊谷、非人の景清、長兵衛、政右衛門、勸進帳の辨慶、小田大炊、由良之助などが自然に目に浮ぶ、大藏卿の如きも忘れぬうちの二である。草摺引の五郎、對面の五郎、暫なども將來に又とは見られないものと思ふ。

團十郎の藝に對する私の意見は、十年前以前青々園君が團十郎傳を著された際、序の代りに書簡體の文を寄せたが、今も其中に陳べた所と格別の相違もない。あれは渴仰の夢から醒めた後の意見なので、幾分か心の反動が手傳つて、團十郎の藝能を眞價よりも少々割引過ぎた氣味もあるが、大體に於ては今でも同様に考へてゐるのである。其頃の變な文體だ

が其儘に引用して見よう。
小生が嘗て聊か異例のやうに存候。ひしは、我が明治劇

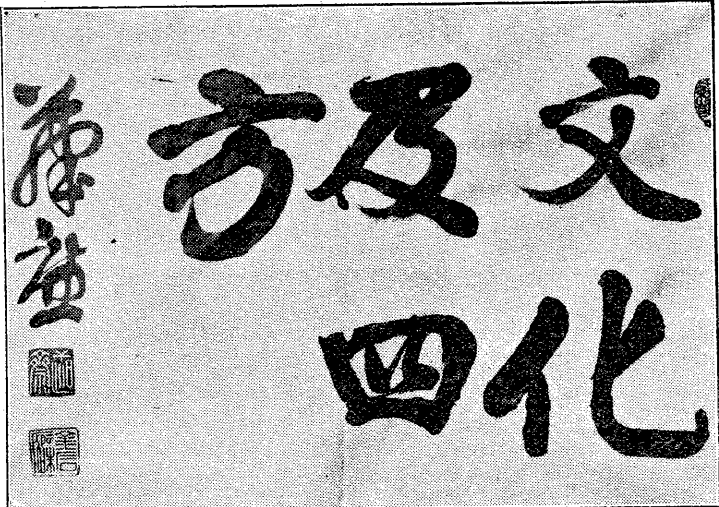


壇の現象に候。大抵文藝革新の機運は文學繪畫などが先にて、音樂其他の演藝は二番手三番手なるが例に候。を、我が明治だけは例外にて、芝居が眞先に反動し、寫實、活歴など、標榜し、團十郎が音頭を取つて、我が國のロマンチズムを鼓吹し、文學者、美術家をば遙かに後の方に從へ候ひしこと、目新しく覺え候。是れ團十郎の絶藝の力に因れるか、或は別に故あるにや、と初手は不審かり候ひき。成程團十郎は、思軒居士のいはれし如く、ずばぬけたる俳優なるべし、あの藝風としては前代未聞、後世にも或は稀有に候はんが、さりとて彼れが藝能にして、果して前述の如き異例を作り候程の器量ありしや否や、此點頗る疑はし。夫れ團十郎の技は、寧ろ簡樸なり、洒脱なり、單純なり。豪宕尊貴によりし、高雅清逸によりし、さりながら無邪の致、佻媚の態、色氣、凄み、下卑、戲謔、賤俗の趣味などは皆乏し。要するに、嚴格にいへばカネルといふ役者でなしと斷じ候時は、こゝに別様の解釋の生じ來るべき理かと存候。

男門衛左吉友住

我が劇の二大系統たる上流の遊びたりし能と中流以下

の愚みたりし歌舞伎とは、雙つながら樂劇にして、共に維新前に其技爛熟の極に達し、彼れは乾枯らび、此れは膿み潰えんとしたる折も折、政治界のガンドウ返しにて社會の主權者は悉く入れかはり、其のうち世間の鏡まるにつれて、彼等福祿足り、虚榮足つて、皆漸く娛樂を思へり。然るに新上流は舊の上、等社會でなく、新中流將た舊の中等社會にあらざれば、舊娛樂を以てして新好尚に適はしめんとするは、冬扇夏爐のとんちんかんにて折合はず。加ふるに、今も昔も、西も東も、樂劇の趣味に限り、幾らか素養なくては、解らねものゆゑ、中流以下から立身せし、さなくば若き頃より國事に奔走して音曲趣味などは皆無なりし當時のキケモ、堅くいへば新社會の主權者連には歌舞伎の面白味は解らう筈なく、解るとも氣に入る筈なし。蓋し薩長武士を筆始にしての時の流行兒は概して武士肌なり。其信仰は勤王、復古、歴史追崇、其主義は改新進取、其經驗は戰闘、破壊、殺傷、其言動は磊落粗豪、然らざれば洒脱簡樸、公家的優柔の態と平民的



遜順の風とは、大きに廢れ氣味といふ時勢なれば、其好尚の向ふ所あらかじめ推知すべく、而して一般世俗もまた能には縁遠く、歌舞伎にも壓き氣味なりとする時は、前に所謂ロマンチズムの異例も、之れを解するに難からざるべしと存候。

男平廉藤近

以上はほんの憶測ながら、之れを事實に徴しても稍當れるに似たる事多し。主として時の上中流の引立に負ふ所ある活歴劇の興隆、樂劇的形式を脱したる能狂言趣味の歡迎、所作立廻りに代れる柔術立廻り、大まかなる又は活潑なる藝風の流行など、何れも此間の消息に外ならずと解する時は、團十郎が成功は、其技能に負ふ所多かるべきか、其天稟と境遇との適合に負ふ所多かるべきか、是れ最要の疑問なり。

小生は思ふ、團十郎は明治劇壇の理想兒なりと。若し彼れをして維新の前に生れしめば、其成功恐らくは此の如くなる能はざりしならん。げにや其特得の藝風は空前また絶後なるべしと雖も、若し一に彼れを學びて次代の名優たり成功者たらんことを期する者あらば、其守株の愚や憫むに堪へたりと存候。然り、團十郎は當

代の寵兒なりき、然れども寵せられて驕らず、耳順に及ぶまでも能く一代の梨園に長たるを得たるは、明かに其識見と精勵と技能との力なり、境遇の故と言はんや。(下略)

つまり團十郎は一代の好尚と理想的人格とを體現するに最も適したる骨相、風采、音吐、藝風を具へてゐたところへ、後天的の種々の補助や修養が加はつて、比較的最もよく時代精神を代表し得る名優となつたのだといつてよい。初代小團次が、黙阿彌の作と相俟つて、頽廢の江戸の現實を體現するに最も適してゐたと同じに、團十郎は、先天的にも後天的にも、初期の明治を代表するに適してゐた。社會國家の經營に適したるらしき大きな人物、同じく豪傑英雄といつても、在來の劇に現れるやうな、街耀的な、誇張的な、不自然なのではなくて、如何にも自然な、眞率な、大やうな、早い話が、三條公とか、西郷とか、大久保とかいふ、時の理想的成功者を連想させるに足る新しい性格を舞臺上に現し得たは、明かに團十郎の特技であつた。で、彼れの藝は、大まかと自然と眞摯とを特色としてゐた。表情も大まか、科介も大まか、白廻しも大やう。ちやうどそれが、其成立の初めに於ては、彼のロダンの彫塑が在來の間に立つて異彩を放つたがやうに、目立つて、彼れの藝をして偉大にも深遠にも高雅にも見えしめた。團十郎の肚藝とは、其暗示力の豊富なるを指したのである。さういふ譯で、何時の間にか團十郎は一代の寵兒となつてしまつた。中年までの不遇に比ぶれば勿論の事、あらゆる古

今の俳優に比べて、彼れの晩年は破格の幸福であつたといつてよい。併し其衰殘は思ひの外に速かであつた。これは其晩年を飾るに適した好い作者を得なかつた爲である。

團十郎の出世藝は少からず黙阿彌のお底を蒙つてゐたのであるが、活歴を理想として以來、彼れは黙阿彌を疎んじて學者連に親近し、それが爲一面大いに益する所があつたと同時に、一面似而非寫實の横道へ外れはじめて、我れと我が藝範圍を押縮めた。此際彼れを歎美する學者中に幾多の素人作者が輩出したのであつたが、作者らしい作者となつて、兎も角も或程度まで晩年の團十郎を發揮せしめたのは、前後唯一人の福池櫻癡あつたのみである。他は何等かの意味に於て、皆悉く櫻癡以下の作者である。

今にして考へれば、流石に櫻癡は最もよく舞臺の團十郎を了解し且つ利用し得てゐたのである。勿論櫻癡とても全く團十郎を利用し得てゐたとは思はれない。單に時代の寵兒として歡迎せられつゝあつた團十郎の特色だけを利用してゐたのである。英雄、豪傑、忠臣、義士、節女、烈婦、達人、碩學智者、勇者といふやうな方面ばかりに目を注いでゐた。此意味からいふと、櫻癡は團十郎の藝範圍をして一段と狭からしめたのである。黙阿彌は、壯時の不器用な團十郎をさへ、無理から縦横に活用したのであつたが、櫻癡は、殆ど常に同じ鑄型の中でのみ團十郎を使つてゐた。さらぬだに何藝でも、晩年には固結するが定例であるのだが、團十郎の場合にはそ

れが思つたよりも早かつた、それは、主として第二の黙阿彌が無かつたからだともいへる。

併しながら當時の作家群中、一人として櫻癡ほどに團十郎を使ひこなし得る者が無かつたのは事實である。櫻癡は比較的最も秀でた團十郎作者であつたのである。私の如きも、一時團十郎の爲にと二三の作を試みたが、今考へれば何れも彼れの藝風には適せないものゝみであつた。私は明かに鑑識を誤つてゐた。牧の方は勿論、片桐且元の如きも、團十郎よりは中村宗十郎、宗十郎よりは、誰れか知らず、も少し新しい役者に適するやうな役柄であつた。

それはともあれ、前の書簡中にも陳べた通り、團十郎の藝風は、もはや過去つた時代に屬するものである。維新當時の好尚や理想は、今日の理想でなく、好尚でない。時代精神がおそろしく推移した。同じく煩悶を表すにしても、團十郎の國家的でもあり、武人的でもあつたから、大まかで、所謂喜怒哀色に現れずの英雄豪傑式の表情を主とし、時としては殆ど無表情といふほどに肚藝を主としたこともあつたが、これからのそれは趣を異にせざるを得ない。初期の明治は、截然たる移り變り時であつて、すべて物事が判然してゐる。勝つも敗るゝも、空竹を割つたやうに始末が附いてゐた。此きびくした時代精神を表すには、團十郎の藝風が最もふさはしいものであつた。併し今はもうさういふ時勢ではない。移り變り時代たるの機運は尙續いてゐるが、如何にも曖昧で、

無解決で、あやふやで、成敗去就ともに殆ど誰れにも解りかねて、きのふの樂觀者が何時悲觀者となるまいものとも知れず、大抵の人の心が、兎もすれば不安の状態にある。一言を以て蔽へば、無解決の時代、不安の時代、煩悶の時代、神氣疲勞の時代である。それゆゑ同じく煩悶を表すにしても、今日の人物の表さうとするには團十郎なぞのとは全く様式を別にしなければならぬ。もつと深刻な、もつと細緻な、もつと痛切な、一家、一城、一國限りの浮沈盛衰に關するにとゞまらぬ、一人の上にして、其實は人間全體、世界全部の上に関聯するのであるといふやうな、苦痛や憂愁が具體的にされねば儼らぬといふ註文が、作者にもあれば見物人の心にもある。時代精神が變つたと共に作意も作風も變り又は變りつゝあるのである。隨つて藝風も根柢から一新されねばならぬのである。

俳優中にも今も尙團十郎を理想として、其藝風を眞似ることを專一としてゐる者が多い。在來の脚本が依然として行はれてゐる以上は、それも差當り已むを得ないことでもあらうが、彼等の前途を思へば、氣の毒の感に堪へない。今にして團十郎を學ぶは、四十年の昔へ逆戻りするるのである。

